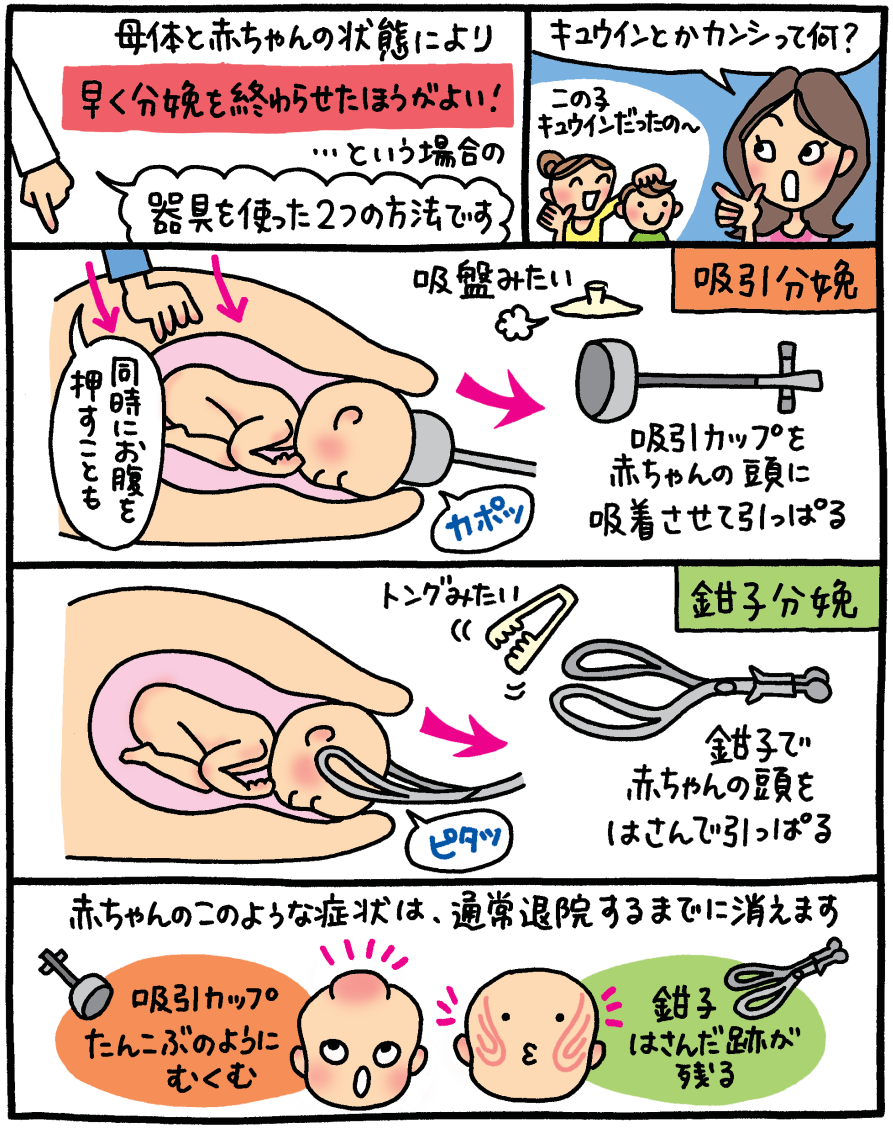
PART 4
器械分娩 ①

# 赤ちゃんがなかなか出ないときはどうする？

## 「吸引分娩」「鉗子分娩」をすることがあります




- お産がスムーズに進まず難産になった時、お母さんと赤ちゃんの状態によっては自然の進行を待つよりも速やかにお産を終了させたほうがよい状況が発生することがあります。その場合の方法のひとつが器械分娩です。吸引カップや鉗子といった器具を用いて行われます。

- 「吸引分娩」とは赤ちゃんの頭に吸引カップを装着し、陰圧をかけて引くことで分娩を助ける方法です。引き出す力が比較的弱いので同時にお腹の上から押すこともあります。また、赤ちゃんの頭に「産瘤（さんりゅう）」といわれるこぶのような浮腫ができやすくなりますが、通常2～3日で消えます。

- 「鉗子分娩」とは赤ちゃんの頭を鉗子で挟み、引き出す方法です。引き出す力が強いので確実性がありますが、赤ちゃんの顔に外傷を与えるリスクもゼロではありません。赤ちゃんの顔には鉗子による圧迫痕ができやすくなりますが、通常2～3日で消えます。

- いずれの方法もリスクがあります。母体へのリスクとしては通常の分娩より傷が大きくなりやすい会陰損傷のほか、おしっこの感覚がなくなる膀胱麻痺があります。数日で感覚は戻りますが、退院後も自己導尿が必要となる場合もあります。

- 赤ちゃんへのリスクとして重大なものに「帽状腱膜下血腫（ぼうじょうけんまくかけっしゅ）」があります。これは帽状腱膜という頭の皮膚の下を覆っている膜と骨膜の間に出血することで、大きく広がったり、出血多量でショック状態になることも。吸引分娩中の発生頻度は1%程度といわれています。また、骨膜下に出血を来たす「頭血腫（ずけっしゅ）」もありますが、こちらは比較的軽度ですみます。

©National Center for Child Health and Development